



ゼミでは教員と学生は同じ目線で意見交換をする



学生と議論する高井さん

## 探訪！ 高井ゼミ

### — ゼミで学ぶ「学び方」 —

大学には「ゼミ」という演習形式の授業がある。少人数の学生と教員からなる学びの場だ。文系学部ではこの場が特に重要な役割を果たす。ゼミとはどのようなものなのか。経済学部の高井哲彦さん（経済学研究科准教授）のゼミに潜入した。

### ゼミという学びの場

「高井ゼミ」。経済学部や法学部のゼミには教員の名が頭につくことが多い。教員と学生によってゼミのカラーは様々だが、高井ゼミはざっくりばらんな雰囲気なかで意見が飛び交う活気のあるゼミだ。

取材に訪れたのは、新しくゼミに入る2年生を選考する日（経済学部では2年後期に約40のゼミから一つを選び、3年生からそのゼミに所属する）。選考の仕方はゼミによって異なる。教員との面談だけで決まるゼミもあれば、企業の採用面接のような選考を行うゼミも。高井ゼミ

では事前に志望理由などを書いた申込書を提出、その後グループディスカッションを行わせ、最後に個人面接をする。そこから先輩のゼミ生が協議を行い、応募学生の採否を決定する。「採用側にまわることで、就職活動の際に自分がどう評価されるかを学生に意識させるねらいがある」と高井さんは語る。

### どう考えるかを学ぶ

経済学部では週に1度、2コマを使ってゼミが開講される。今年度の

高井ゼミでは「西洋経済史：経済・ビジネスの発展論」をテーマとし、卒業研究についての報告や文献講読、小論文を書くワークショップなどを行う。構成員は20名弱。学生は知識やツールを得るだけではなく、「物事をどう考えるか」を学ぶ。つまり、自分で問題を見つけて調べ結論を導く、一連の流れを習得する。

このゼミが重視するのは「実証研究」。経済学部は大都市のビジネス街から徒歩圏にあるため、企業や官庁へ調査活動に出かけることが容易である。もう一つが「留学」だ。高井ゼミでは、約半数の学生が1年以内の留学をする。行き先は東南アジアや西欧、北欧など多岐にわたり、卒業研究にもこの経験が生かされていく。「終着点は卒論」と高井さんは言う。自分でテーマを探し、調査し、考察する—その力は「ゼミ」という、年齢や経験の多様な人間が入り混じった空間で鍛え上げられる。